December 号外 2017

過去と現在を行き来しながら、未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ

上町台地 今昔フォーラム vol.8 Document

UEMACHIDAICHI KONJAKU TIMES

企画・編集　U-CoRoプロジェクト・ワーキング ／ 発行　大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
問合せ先　tel.06-6205-3518（担当：CEL弘本）※U-CoRo＝ゆーころ（上町台地コミュニケーション・ルーム）
ホームページ　http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

第8回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。

"大阪のお地蔵さん"に学ぶ、まちと暮らしの今昔物語

～人々の願いとともに移り変わり生き続けるお地蔵さんの習俗と生活文化から～

今回のフォーラムでは、長年にわたって大阪のお地蔵さんの歴史・民俗を綿密に調査研究されている田野登氏による基調講演に始まり、渡辺尚見氏による戦前からの路地コミュニティが残る空堀界隈での地蔵盆の調査報告とナイトツアーの紹介。最後に、ご来場のみなさまから、コミュニティの行事として幅広い住民の方々に親しまれている地蔵祭（地蔵盆）や子ども盆踊りの様子をお伝えいただきました。お地蔵さんを介した人々のつながりのあり様、その移り変わり、最前線の姿をお伝えいただくとともに、お地蔵さんとまちと暮らしの今昔についての貴重な語り合いの時間となりました。

■日時：2016年9月10日（日）14：00～17：00
■場所：大阪ガス実験集合住宅　NEXT21
　2階ホール（大阪市天王寺区清水谷町6-16）
■主催：大阪ガス エネルギー・文化研究所（CEL）
　企画：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
■プログラム：
　基調講演　講師 田野 登氏
　（大阪民俗学研究会 代表、『大阪春秋』編集委員）
　報告　レポーター 渡辺尚見氏（からほり倶楽部 理事）
　わがまちのお地蔵さんトーク

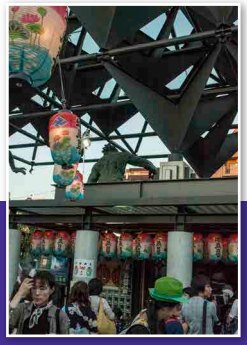
▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」第8号（1面）

U-CoRo Step 2 壁新聞プロジェクト 関連イベント

過去と現在を行き来しながら未来を考える「上町台地・今昔タイムズ」第8号のテーマは「有為転変、世情によりそい願いを映し よみがえるお地蔵さんとまちの暮らしの縁起」。「除災招福」を願う辻で、地蔵巡りで賑わうお堂で、町家が立ち並ぶ街角で、寄り添う路地のコミュニティで、お地蔵さんは幾多の時代の変化の荒波を被りながら、人々の暮らしを見守り続けてきました。

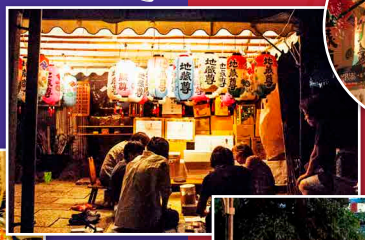
＊プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。

背景の絵は、『難波鑑』（1680年）の盆踊りの図ほか（切り抜き、着色など改変、大阪市立図書館デジタルアーカイブより）。



一心寺地蔵盆フェスティバル
（天王寺区逢坂2、2017年8月24日）

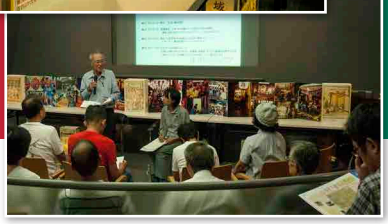
空堀の地蔵盆（天王寺区谷町6、2017年8月23日）



日限地蔵院の地蔵盆（中央区釣鐘町、2017年8月23日）

将軍地蔵尊の子ども盆踊り大会
（天王寺区上本町、2017年8月24日）

方除地蔵尊地蔵祭
（天王寺区東上町、2017年8月23日）



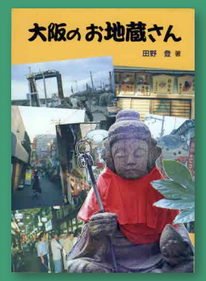
フォーラム会場に直近の地蔵盆の写真と絵行燈（再現）を展示

〈講演ダイジェスト〉

“大阪のお地蔵さん”の歴史・民俗を紐解く

田野 登氏　大阪民俗学研究会代表、『大阪春秋』編集委員

たの・のぼる
1950年大阪生まれ。大阪市立大学文学部卒業。日本民俗学会会員。著書に、『大阪のお地蔵さん』（渓水社 1994年）、『水都大阪の民俗誌（大阪叢書）』（和泉書院 2008年）ほか。博士（文学）。



大阪の地蔵盆の特徴は？

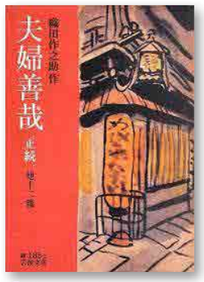
大阪のお地蔵さんについて語るとき、まず思い浮かぶのは、地蔵盆の夜の踊りの情景です。私自身、子どもの頃、福島区の鷺洲の長屋で祀られていた地蔵さんの前で踊っていました。

1986年当時、私は教師として勤めていた市岡高校の生徒たちと港区・西区で地蔵の調査をしていましたが、ここでも地蔵盆には多くの所で踊っていました(図❶)。今から30年前の昭和の末の頃のことです。

地蔵の前で踊る大阪の地蔵盆

大阪の地蔵盆の踊りは文学作品にも出てきます。

「熱海の宿で出くわした地震のことが想い出された。やはり暑い日だった。十日目、ちょうど地蔵盆で、路地にも盆踊りがあり、無理に引っぱり出されて、単調な曲を繰りかえし繰りかえし、それでも時々調子に変化をもたせて弾いていると、ふと絵行燈の下をひょこひょこ歩いて来る柳吉の顔が見えた。行燈の明りに顔が映えて、眩しそうに眼をしょぼつかせていた。」



❷織田作之助『夫婦善哉』の表紙

これは、織田作之助の名作『夫婦善哉』の一節(図❷)。地震というのは1923年の関東大震災のこと。小説だから、社会風俗を正確に写すのは目的ではないが、そこでも地蔵盆が取り上げられています。これが、どこまで大阪独特のものだと言えるのかは別にして、三味線を地方（じかた）にして踊るというのが大阪の昔の地蔵盆のひとつの特徴ではなかったかと私は思います。

❶1986年、西区九条北の子安地蔵の地蔵盆での盆踊り

折口信夫いわく、大阪は野性を帯びた都会生活

大阪出身の国文学者・折口信夫は自らの故郷・大阪の暮らしを「野性を帯びた都会生活」と評しています。東京は、趣味の洗練・粋を誇り、三代住めば江戸っ子というのに対して、大阪は二代目、三代目で家が絶え、つねに新興の気分を持ち、洗練されない趣味を持ち続けているとも述べています。これは斎藤茂吉への手紙の一文で、少し気取って書いたのかも知れません。

折口にとって故郷・大阪はまことに野暮ったい都会だったようです。その大阪では、今も地蔵盆が盛んに行われ、その晩、お地蔵さんの前で町内の人々がよく踊る。踊りには土俗性があり、やはり多少は野性を帯びたものにも見えます。

踊りは大阪人のDNAにあるもの

1986年の西区九条北の盆踊りの写真を見ると、後方に地蔵を祀っている前で、大勢が踊っています(図❶)。これはいわば大阪の人のDNAにあるものではないか。まるで身に染みついているような踊り好きという感じの少年も写真に写っています。

その意味で、現在の地蔵盆踊りの圧巻は、天王寺区上本町の将軍地蔵尊の地蔵盆でしょう。将軍地蔵尊保存会の主催により小学校の校庭で盆踊りが毎年盛大に繰り広げられています。8月23・24の両日とも子どもが夕方6時半から9時まで踊り、その後は大人の時間で、揃えの浴衣を着た人たちも踊っています。

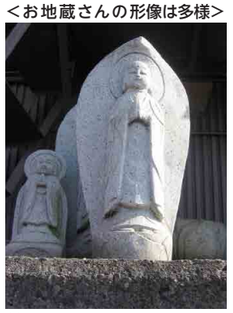
地蔵信仰の世界の広がり

お地蔵さんの尊像の形像はさまざまです。よだれかけ（前垂れや袈裟とも）を着け、宝珠をもつことが多い。例えば、まちで見かけるのは、石像で舟形光背をもつ合掌姿(図❸)とか、石の丸彫で錫杖と宝珠をもつ姿(図❹)、また、先述の将軍地蔵尊は錫杖をもつ座像(図❺)で、実に多様です。

子どもを救うお地蔵さん

「地蔵は、数多くの仏菩薩の中でも、もっとも日本人に身近な存在ではなかろうか」と論じているのは『日本民俗学概論』（福田アジオ・宮田 登編 吉川弘文館

＜お地蔵さんの形像は多様＞


❸舟形の光背で合掌形のお地蔵さん

❹赤いよだれかけをし、手に錫杖をもつお地蔵さん

❺天王寺区上本町の将軍地蔵尊は冑を被り腰掛けた姿

1983年)です。

同書によると、地蔵信仰は中国において発展したのちに日本に伝来し、その後、平安末期から鎌倉期にかけて、当時の末法思想とも関連して、日本人の信仰生活に浸透していったとあります。

それは、浄土教が世に広まっていく時代のことで、このときから、地蔵信仰の特徴である子どもとの結びつきが生じてきます。こうした子どもとの関係の深さは日本の大きな特徴で、中国にもインドにもないものです。

特に、現世と来世の境界にある賽の河原で、地蔵は地獄の鬼から子どもを守ってくださるというイメージは、今も各地で唱えられる「地蔵和讃」(表❶)の流布を通じて、近世以降の民衆に強くアピールしてきました。

昔から、不運の死を遂げた子どもの供養のため地蔵像を建立する例も少なくありません。だから、私も調査に行ったら、そのお地蔵さんの由来などは最後にお尋ねするようにしています。それは、「実はうちの孫が亡くなってね…」とか。涙ながらに語られたりするのも珍しくないからです。

地蔵の石像に赤いよだれかけが掛けられるのも、地蔵と子どもの一体感から出ているものだと指摘されるように、子どもを救うお地蔵さんのイメージは古くから日本に定着してきたものでした。

悪しきものをさえぎる地蔵

同書は、「現世と来世との境の仏としての地蔵は、村の辻固めの神である道祖神（サエノ神）と習合した」と説明します。「サエ」は、さえぎる意。地蔵は、村の境で悪しきものの侵入を阻む存在でした。今でも村境に地蔵が多いのはそのためです。

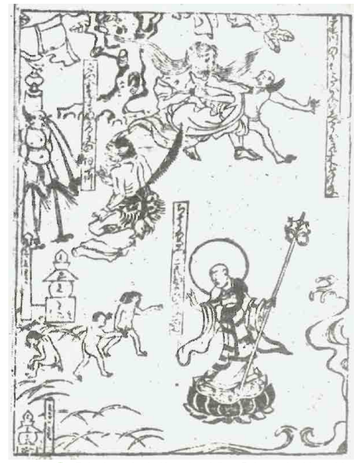
また、地蔵の多様性についても、「地蔵は人間側の希求に巧みに応ずるという形式でもって、時代ごとに民衆ときわめて密接な関係をもってきた。延命地蔵なども近世以降、民衆の人気を得た一例である」と記しています。

続けて、「昨今大いに隆盛をみている水子地蔵も又その一例である。供養の対象が水子という子供の霊であることと同時に、世間的には公表しにくい対象への供養という場面で、他の仏菩薩ではなく地蔵が人々の関心をよぶ点は興味深い」というように、同書出版の1983年頃には、日本では水子信仰の広がりが顕著に見られました。

要するに、「地蔵は世の動きに敏感な仏なのである」と同書も説明するように、地蔵さんは融通無碍な存在なのだということです。

地蔵和讃に表象されるイメージ

室町時代の物語『富士の人穴草子』に「賽の磧（さい かわら）・幼き者・地蔵菩薩」の挿画があります(図❻)。この画は後世のものでしょうが、同書のいくつかの版本や写本で描写されるのは、賽の河原で幼い子が石組みをし、そこにお地蔵さまが登場してくるという光景です。それが、このように図像化されたものが宗教者を通して一般に語られ、より具体的にイメージ化されてきたと言えそうです。つまり昔から「賽の河原」があったのではなく、むしろ図像化されることにより、それがイメージ化されたのではないかと思われます。


❻『富士の人穴草子』の挿画「賽の磧・幼き者・地蔵菩薩」（『室町時代の小説集』より）

先にも出てきた「地蔵和讃」は、地蔵菩薩を和語で讃嘆した七五調の歌です(表❶)。

子らが父母のためと積む石の「一重くんでは」は「一重積んでも」とも言いますし、石組みを崩すのは「鬼」ではなく、風が吹いて崩れるというのもありますが、地蔵尊像の裳裾にみどり児がすがりついているという姿が胸を打つ物語です。

「地蔵和讃」のなかで、特に親しまれ受けつがれてきたのが、この「賽の河原」の物語。繰り返しになりますが、それは古く室町期の御伽草子などからつながるイメージなのでしょう。地蔵信仰が子どもに広がることなるには、そうした下地があり、幾重にも条件が重なって成立したものだと言えそうです。

表❶ ＜地蔵和讃＞
これはこの世のことならず　死出の山路の裾野なる　賽の河原のものがたり　聞くにつけても憐れなり　二つや三つや四つ五つ十にも足らぬみどり児が　賽の河原に集まりて　父上こいし母こいし　河原の石をとり集め　これにて回向の塔をつむ　一重くんでは父のため　二重くんでは母のため　日も入りあいのその頃は　地獄の鬼が現れて　くろがね棒をとりのべて　積みたる塔をおしくずす　そのとき能化の地蔵尊　われを冥土の父母と　思うてあけくれ頼めよと　幼き者をみ衣の　裳裾のうちにかき入れて　憐み給うぞありがたき　未だ歩めぬみどり児を　いだきかかえてなでさすり　憐み給うぞありがたき　南無阿弥陀仏あみだぶつ

（宝田正道「地蔵和讃の由来と伝承」『地蔵さま入門』大法輪選書 1984年より）

宝田正道は『地蔵さま入門』（大法輪選書1984年）という本で、この地蔵和讃については、「歌詞も曲も、いろいろ増広、圧縮、変改されつつ、哀調切々として胸打つところから、好んで今日に伝承されてきたものと推察できる」と説明しています。

大阪の地蔵信仰の歴史・民俗

地蔵信仰が大阪に広がるにも条件がありました。歴史的資料に登場してくる内容を時系列で見ていくと、時代によって同じ地蔵さんの記述も変わっていくのがわかります。

近世大坂の地蔵祭り

延宝8（1680）年の『難波鑑』の挿画に「辻々の地蔵祭」があります。描かれているのは町内の入り口の木戸と地蔵（図❼）。地蔵はここでにらみをきかし、これより外のものを遮断する存在なのでしょう。

ここで紹介されているのは、安堂寺町の東横堀川を西に越えたところにあるお地蔵さんで、熱病を治すという霊験で知られました（表❷）。ただ、そのためには、縄をお地蔵さんにかけて祈願し、病が治ると縄を解くという脅迫的手段をとりました。こういうところは、現代人の感覚との違いを感じさせますが、願かけの際の熱意のひとつの表現とも言えそうです。

❼『難波鑑』（1680年）の挿絵に描かれた地蔵祭り

表❷ ＜『難波鑑』より＞
地蔵祭　同廿四日
けふハ地蔵の御えん日にて、町々の辻に、わらバへとも供物灯明をかゝげてまつる也。取分、安堂寺町東堀壱丁目の門の脇に、あぶらかけの地蔵とて、いにしへよりあり。此地蔵よく、瘧病をなをし給ふとて其宿願にハ、縄をかけ置、やまひ癒時ハ、かならす縄をときまいらする。寔苦労なる地蔵の体、見るもさなから堪かたくこそ侍れ。

盆踊りと地蔵盆の関係

同じ『難波鑑』に「ぼんおどり」の挿画もあります（図❽）。でも、これは地蔵盆のものではありません。実は、近世の絵で、地蔵の前で踊っているものは今のところ見当たりません。『難波鑑』では、盆踊りは盆月の一連の行事として、盂蘭盆会と並んで挙げられています。思うに、盆月に踊っていたものが、次第に地蔵盆でも踊るというようになったのかも知れません。

❽『難波鑑』（1860年）の挿絵に描かれた盆踊り

「地蔵巡り」のはじまり

宝永5（1708）年12月の『摂陽奇観』には、大阪での地蔵巡りのはじまりについての記載があります（表❸）。

表❸ ＜『摂陽奇観』の地蔵巡り＞
十二月　大坂地蔵巡り初ム
仏土山十万寺第六代主説空なる僧大坂におゐて四十八ヶ所の地蔵巡礼を初め猶諸人に信心なさしめん為に十輪経および占察経本願経延命経の要文を直談して地蔵菩薩の大慈大悲深長なる事を示せり曾又順礼所を四十八ヶに定る事や此菩薩身を四十八種に分て衆生を利益し給ふに表ス猶委しき縁記あれ共爰に略し四十八ヶ所の巡礼の寺々は左に記ス

『摂陽奇観』（『浪速叢書』1928年より）

あるひとりの僧が大阪で地蔵巡りを始め、地蔵の48カ所を定めたうえで、それぞれの略記を記録したとあります。

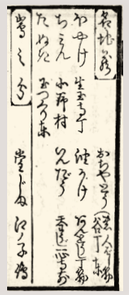
その48カ所の一番は福島の光智院、そこから、順路としては、東回りで、天満、上町、天王寺と巡り、道頓堀では法善寺に寄り、最後に四十八番の阿弥陀池の和光寺に至るというものです。

一番の福島光智院の地蔵像は伝教大師作となっていますが、他のところでも弘法作というものもあって、かなり伝説的な仏像が記録されています。

近世大坂の名地蔵

安永6（1777）年の『難波丸綱目二』には、「名地蔵」の項があり、6カ所があげられています（表❹）。

表❹
＜『難波丸綱目二』の名地蔵＞
おちやとう
　農人ばし筋 谷丁東
ほやけ　生玉寺丁
油かけ
　あんとうし丁筋
ちみん　北野村
いんだう
　天わうじ一心寺前
たぬき　玉つくり東

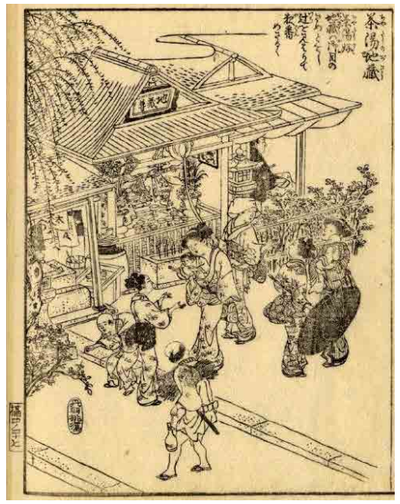


茶湯地蔵は、農人橋から上町台地の方に進んだ先、谷町の東にあります。生玉寺町にあるのは、頬焼け地蔵。油掛地蔵は、先ほどの安堂寺町の地蔵。北野村の「ちみん」は今は不明です。引導地蔵は天王寺一心寺の前にあり、玉造東のたぬき地蔵も現在では不明のもの。

この時代にもある一般的な六地蔵※と重なっているのは、頬焼地蔵と引導地蔵だけのようです。六地蔵がどんな時代でもずっと同じだったのか、あるいは48カ所巡りも全部を順に回ったのかなど、確かなことはよくわかりません。時代により欠番も出てくるので、かなり融通がきいたのかも知れません。

寛政8～10（1796～98）年の『摂津名所図会』巻四にも、茶湯地蔵が出てきます（図❾）。「農人橋條百間長屋の角にある石像にて長弐尺祈願のもの茶湯を供ずれバ霊応ありと云故に名によぶ」と。

※大坂の「六地蔵巡り」は、①天満長柄村・国分寺、②網島・大長寺、③八丁目中寺町・天然寺、④谷町筋西頬焼地蔵・専修院、⑤天王寺引導地蔵・天暁院、⑥道頓堀・法善寺とされた。



❾『摂津名所図会』（1796～98年）に描かれた茶湯地蔵

また、この茶湯地蔵については、文政7（1824）年の『神仏霊験記図会』では、もっと詳しく紹介されています。

同書には、大坂の霊験あらたかな事例が全部で68挙げられているなかで、地蔵の事例は8件も上がっています。

まず、同書6番の龍海寺子安地蔵には、「懐胎の婦人参詣すべし」とあります。御縁日は二十四日です。

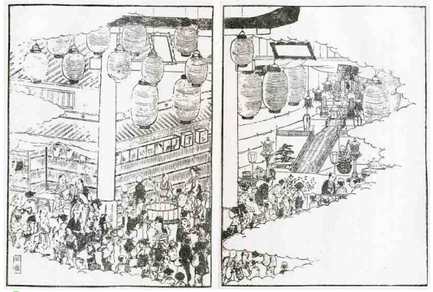
25番の霊験地蔵尊は、「御礼にハ絵馬を奉納す」とあります。ここでは後からお礼に絵馬を奉納するとのこと。また、「百度参をせんと思ハバ標石北の門際にあり」と、お百度参りもこの頃にあったことがわかります。

27番の抹香地蔵さんには、「本復の後御礼には抹香を供ぜんと誓へバかならず霊験あり」と、お礼に抹香をお供えしますと先に言挙げするとよいようです。

28番が幸橋地蔵尊で、歯痛に効く。その後は、「塗箸にて食事せざるやう誓言」すべしとあります。

31番の油懸地蔵は、先ほどの安堂寺町のもので、ここでは、石仏に油をかけて祈願をすると記されています。

38番は茶湯地蔵。この書では特に子どもに霊験ありとのこと。「小児の髪を惜ミ又は月代を嫌ひて泣叫ぶに」、つまり髪を剃るのを嫌がる子どもには、「霊前に供ずるお茶湯を小児にいただかせ其あまりし茶にて月代をよくもみて帰るべし」と書いてあります。



❿『摂津名所図会大成』の瀬戸物町地蔵会（『浪速叢書』1928年より）

56番の新清水地蔵は、この辺には花屋がないので寺町で買っていった方が良いと書いています。商売人とこの本が提携しているのかも知れません（笑）。

68番は地蔵堂へ奉納された絵馬です。その絵柄は強面の武将・鎮西八郎為朝が疱瘡神をやっつけるもので、子どもの疱瘡を軽くすませるというものです。絵馬はまさに都市の生活者からの神仏へのリクエストカードなのです。

幕末の『摂津名所図会大成』（安政2・1855年以後）には、瀬戸物町の地蔵会の賑わいが描かれています（図❿）。近くにある火除地蔵さんをこの地蔵会の時に浜に出してきて、盛大にやるわけです。瀬戸物は燃えませんが、緩衝に用いる藁はよく燃えます。それに、どうも、瀬戸物町の売り出しと兼ねているようです（笑）。

近世の地蔵への祈願

江戸時代の『難波鑑』『浪花のながめ』『神仏霊験記図会』『摂陽奇観』などの記述から、近世の祈願内容を整理してみると（表❺）、町内では火防が多く、個人では除災招福と治病。また子ども関係のものも多い。この時代、なによりも地蔵は町内の守り仏だったわけです。

表❺ ＜近世の地蔵への祈願＞
1. 町内：火防
2. 個人：
【除災招福】 安産、子安、息災延命、福智増益
【治病】 諸病平癒、疱瘡治癒、小児の諸病平癒、小児の髪惜しみ止め、小児の乳呑み、歯痛治癒、五痔平癒、頭痛しずめ、瘧病治癒、眼病治癒
（『難波鑑』『浪花のながめ』『神仏霊験記図会』『摂陽奇観』などより）

地蔵受難時代のはじまり

近代になると、突然、お地蔵さんには受難の時代がやってきます。

明治5（1871）年7月に、大阪府から「地蔵祭ノ停止」の布令が出されます。それは、この開化の時代に、地蔵祭りなどというもので金銭を出し合って、町内で飲食するなどは旧習だから、もうやめなさいというものでした。

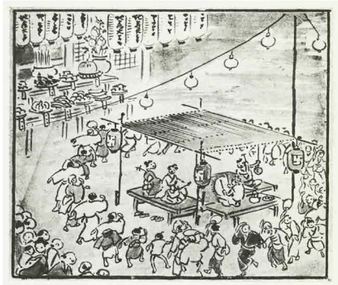
ところが、この布令に効力がなかったのか、同年11月には、「町内路傍・環境ノ整備」の布令が出されています。

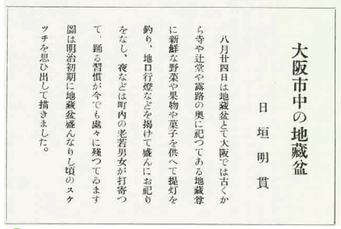
町内の地蔵堂を取り除いた跡に、往来の妨げにならない場所で、「一町内に一ヶ所宛塵捨場を設」け、「一区内に一ヶ所宛大便所を」設けるようにとの内容で、地蔵堂がある場所は本来公共の空間だから、地域整備に活用すべしというものでした。

しかし、このような厳しい禁止令があったにもかかわらず、お地蔵さんはその後もしたたかに生き残っていきます。

また、これと同時に、新しい動きも生まれてきます。近代化が進むにつれて排除されそうになってきた土俗的なものに逆に関心が高まり、地蔵に対しても知的な関心が寄せられはじめたようです。

郷土研究雑誌『上方』の20号（1932年8月）には、明治期の大阪市中の地蔵盆について挿画と文が掲載されています（図⓫）。





大阪市中の地蔵盆
日垣明貫
八月廿四日は地蔵盆とて大阪では古くから寺や辻々や露路の奥に祀つてある地蔵尊に新鮮な野菜や果物や菓子を供へて提灯を釣り、地口行燈などを掲げて盛んにお祀りをなし、夜などは町内の老若男女が打寄つて、踊る慣習が今でも處々に殘つてゐます。図は明治初期に地蔵盆盛んなりし頃のスケッチを思ひ出して描きました。

⓫『上方』20号（1932年8月）の地蔵盆の記事

図❼❽❾、表❹は、大阪市立図書館デジタルアーカイブより

⑫『上方』9号（1931年9月）の後藤捷一「上方地蔵巡礼」

⑬『上方』32号（1933年8月）の船本茂兵衛「地蔵祭と地蔵尊の由来」

昭和末期の地蔵と地域コミュニティ

私は、1988年にこの同じ高津界隈を四條畷高校の生徒たちと再調査しました。50年前の船本茂兵衛さんの調査で93カ所あったのが、生徒たちと懸命に探したのですが、この界隈に見つかったのは10カ所だけでした（図⑭）。

後藤捷一「上方 地蔵巡礼」（『上方』9号1931年9月）には59の地蔵が紹介され、その中には実地調査によるものも含まれています（図⑫）。なにより、同誌に連載された船本茂兵衛の「地蔵祭と地蔵尊の由来」（32、34、36号1933年8、10、12月）は特筆すべき調査だと言えるでしょう（図⑬）。

私も、地蔵さんを調べ始めた頃に、「地蔵調査カード」をつくり、名前、場所、向き、地蔵盆行事、それ以外行事、願掛け、由来、というように何項目かを調べるようにしました。ところが『上方』をくっていたら、船本茂兵衛は50年前に同じようなことをしている。しかも一地域を限定して調べているのにもとても驚きました。

この船本茂兵衛が調べたのは93ヵ所。その内容をもとにして、近代の地蔵への祈願の内容を整理してみました（表⑥）。

この中の「市場の繁栄」は、黒門市場があるからでしょう。当時は「病気の平癒」が強く求められていますが、明治18（1885）年にコレラが流行したため、コレラ除けなども重視されたようです。

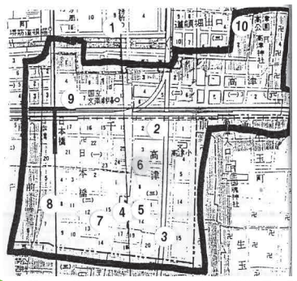
表⑥　<近代の地蔵への祈願>

1. 町内では、
　火難除、盗難除、長家守護、市場の繁栄
2. 個人では、

【除災招福】 安産、無病息災、長命、災難除、子供の健全成育、子供の安全、商売繁昌

【治病】 悪病・コレラ除、疱瘡除、子供の夜泣きなおし、眼病治癒、首より上の病気治癒、かん虫なおし、痔病治癒、婦人の下の病気治癒、頭痛しずめ、瘧病治癒、吹き出物治癒

（船本茂兵衛「地蔵祭と地蔵尊の由来」『上方』32、34、36号1933年8、10、12月より）



⑭高津界隈の地蔵は10カ所に減少（1988年調査）

西区で実施した地蔵の実地調査

少し前の1986年に、私と市岡高校の都市文化研究会の生徒たちは西区でもお地蔵さんを調査して、綿密な成果を残しています。

調査した地蔵は63ヵ所。それを西区地蔵マップにまとめましたが、木津川の西側と東側とで全く分布が異なりました。川の西が44件で東が19件（図⑮）。それと西区の戦災地図を重ねると、ちょうど地蔵の密集地が戦災で焼け残っているところだとわかりました。

祭祀組織の中心は昔の「となり組」

お地蔵さんは、近所の人の手で祀られていることが多いのですが、その組織について尋ねてみると、今の行政組織にない「となり組」が出てきたりします。川西の地蔵44件では17件がそうでした。特に焼け残ったところではとなり組が主で、加えて個人で祀る例もありました（図⑯）。

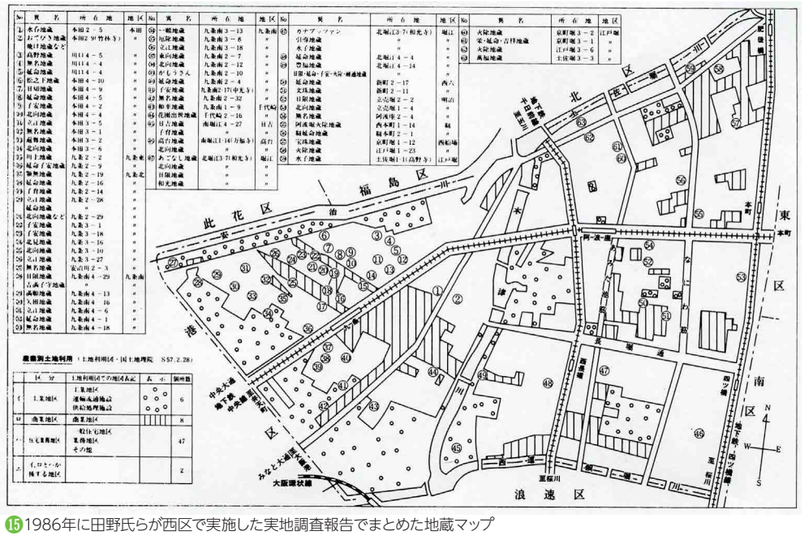
組織と街路については、となり組は路地で祀っていることが多く、これは3m未満の道で（それも井戸端であったりもします）が、川西は9で川東は1です。表通りにあるのは川西は4で川東は9と、川東の方が多く、街路の広さと組織との間に関連性があることがわかります。

昭和末期の地蔵への祈願内容

このときの調査結果からも「祈願内容」を分析しています（図⑰）。92件の中に32項目がありましたが、それ以前の例と比較して、「治病」がとても少ないのが特徴的です。現代では、お地蔵さんに頼んで病気を治そうというのはもう希少な例のようです。例えば水をもらって目を洗うとかは逆に悪くなりそうで怖い（笑）。

地蔵盆の踊りは晴れ舞台

地蔵盆では、川の西にある44件のうち17件で踊っていました。川の東ではゼロ件です。



⑮1986年に田野氏らが西区で実施した実地調査報告でまとめた地蔵マップ

⑱1986年、西区九条北の北見地蔵の盆踊り

1986年の西区九条北の北見地蔵の写真を見ると、地蔵盆で浴衣を下ろしてもらい、幼いお嬢ちゃんも少し背が高いお姉ちゃんもみんなで踊っています。櫓（やぐら）を組むスペースがないから地蔵さんの前を通過していくわけです（図⑱）。

祭祀の由来・霊験譚

九条南三の立江地蔵には、祭祀の由来のひとつの典型と言えるものがあります（図⑲）。記録によると、この地蔵さんは、「明治9年以前から祀られている。八尾の方の川を流れていたのを拾ってきて祀ったと聞く。昭和9年室戸台風の時、お堂ごと、尊像も、道路のところに流されてしまった。そこで、お堂を、よその場所に移し、尊像をお祀りしていたが、また元の場所に帰って来られた」

こういう話はよくあること。

「その時、コンクリートでお堂の底を固めたところ、……」

いったい何があったのか？

「4件も立て続けに事故が起き、子どもが車に轢かれて死んだりもした」

⑲西区九条南三の立江地蔵には霊験譚が伝わる

これは凶事、ひとつのサインです。

「すると修行者のお告げに、狸のクロさん（伏見稲荷のゴンクロウ狸とのこと）が出てきて」と。次には、ご託宣。

「“コンクリートで塞いでは、出入りができない。息ができるようにしてくれ”とのことがあり」

そこで、「コンクリートに穴をあけた。それ以後、事故はない」とのこと。

神仏の霊験譚というのは、こういうことの繰り返しなのです。

さらに、「昭和24、25年頃、紙芝居をしている最中、道路の西の方から、馬力が突っ込んで来たが、一人も怪我をしなかった」とも言います。

もう、地蔵さんは守り仏。だから、「狸のクロさんはお地蔵さんのお使いかもしれない」ということになります。

これは、祟り伝承の展開《凶事→託宣→祭祀→吉事》のパターンなのです。この展開は御霊信仰に通底します。凶事には、子どもの病気もあれば、交通事故もある。託宣も様々。行者が告げたというのがあれば、仏壇屋の大将が言ったというのもある。こんなことをほったらかしにしているので、こうなったと誰かが言う。ちゃんと洗って祀ってあげたら良いと。そこで、言う通りにすると、現金なもので、それが守り仏になり、町内のみんなに祀られる幸せな地蔵さんが生まれるわけです。

地蔵調査をしてみたら、どこかで「子ども」の話と重なるし、「町内」のことになる。それから交通事故など「凶事」につながる。例えば、町内の子どもが病気を患って、それによって地蔵さんを建てたとかの話が出てきます。町内にからんで様々な凶事が起こり、しかも子どもがらみが多い。私は、これを〈子ども－町内－凶事〉の三角形と言っています。

地蔵尊をめぐる人々の共生

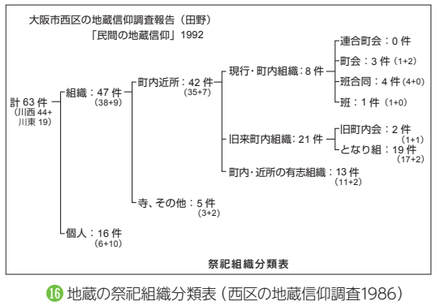
地蔵尊をめぐっては、様々なかたちで、人々の共生の姿が見受けられます。私は、拙著『大阪のお地蔵さん』にいくつかの事例を挙げました（図⑳）。

例えば、①の船場の油掛地蔵には、なぜか高い線香が立てられています。台湾の製品で、近くに泊まる外国の人が願かけをしている様子でした。

⑤の鶴橋のチョゴリ地蔵さんは、昔、韓国の子が屋根から落ちて亡くなったことがきっかけで祀られたもの。お地蔵さんに国境、国籍はないことの一例です。

⑩ウチナーンチュのお地蔵さんは、沖縄出身の人が祀っています。自然石で面白いものですが、神がかりな話がきっかけでつくられたということで、地蔵信仰を通じて、石の信仰も見えてきます。

大阪市西区の地蔵信仰調査報告（田野）
「民間の地蔵信仰」1992



祭祀組織分類表

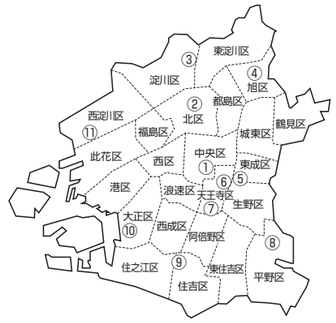
⑯地蔵の祭祀組織分類表（西区の地蔵信仰調査1986）

大阪市西区の地蔵信仰調査報告（田野）
「民間の地蔵信仰」1992

対象		祈願内容	項目数（件数）	
自然・世界			0	
町内		交通安全（7）、火災除（6）、町内安全（5）、町内守護（2）	4（20）	
家内		家内安全（10）	1（10）	
個人	除災招福	子供祈願（11）、健康（5）、子供安全（4）、子供成長（4）、入学・受験合格（4）、水子供養（3）、子授（3）、子供壮健（3）、子守（2）、安産（2）、子育（2）、無病息災（2）、鬼門除、厄除、商売繁盛、災難除、入社、盗難除、夫婦円満、乳授（各1）	20（53）	28（62）
	治病	子供病気治癒（2）、脚気除、顎より上の病気治癒、下の病気治癒、病気治癒、頭痛しずめ、禁煙、痔疾治癒（各1）	8（9）	
計			33（92）	

祈願内容分類表

⑰地蔵の祈願内容分類表（西区の地蔵信仰調査1986）



①アジア人に霊験あらたか船場の油掛地蔵：中央区南船場・油掛地蔵尊
②冥土の門のお地蔵さん：北区豊崎・道引地蔵尊
③夜泣き地蔵と笑い地蔵：淀川区東三国・大願寺笑い地蔵尊
④井路端の酒浴び地蔵さん：旭区千林・朝日地蔵尊
⑤鶴橋のチョゴリ地蔵さん：東成区東小橋・子安親善地蔵尊
⑥朱雀大路脇の北向地蔵さん：天王寺区細工谷・北向地蔵尊
⑦弘法井戸のお地蔵さん：天王寺区堀越町・清水地蔵尊
⑧戦国環濠都市のお地蔵さん：平野区平野東・田畑口地蔵尊
⑨六道の辻のお地蔵さん：住吉区東粉浜・閻魔地蔵尊
⑩ウチナーンチュのお地蔵さん：大正区千島・風切り地蔵尊
⑪「煙の都」のお地蔵さん：西淀川区百島・延命地蔵尊

⑳大阪のお地蔵さんの世界《平成版 大阪地蔵十一カ所巡り》

㉑「大阪市立九条北小学校校区地蔵マップ」2008年

㉒西区九条北の子安地蔵の取り除かれる前（上）と取り除かれたあと（右）

㉓港区南市岡にあったお地蔵さんが、同区内のお寺に預けられていたのを発見

少子高齢社会の地蔵祭祀

2008年に発行された碇安弘氏作成の「大阪市立九条北小学校校区地蔵マップ」は、私たちが調べてから20年後の調査結果によるもので、それによると同地の地蔵を安置する場所は減り、1986年に23ヵ所だったのが2006年には18ヵ所になっていました（図㉑）。

実際、西区九条北の子安地蔵を先日訪ねると、普通の民家のガレージになっていました。どうやら地蔵を取り除けないと土地が売れなかったようです（図㉒）。

港区の場合でも、南市岡のお地蔵さんが、2010年夏にはなくなっていました。ただ、この地蔵さんは蓮華の花を手にしているのが特徴だったので、調べてみると同区の天台宗日輪寺に祀るお地蔵さんのなかに安置されているのを発見しました（図㉓）。

港区南市岡の波切地蔵は、2010年6月にはあったのですが、2013年9月8日に行ってみたらなんと更地に。ところが、同じ祠が町内の牛乳屋さんの軒下に移されてありました。同地では、今も盆踊りを行いみんなで踊っています。

2017年8月24日「地蔵盆」

この日は夕刻から、私は上町台地と西区、港区の地蔵盆を駆け足で回りました。

まずは、中央区上本町の六万体地蔵尊。夜になると提灯に灯が入ります（図㉔）。

次に、天王寺区上本町の将軍地蔵尊。ここが一番準備も進んでいました（図㉕）。

天王寺区大道の土塔地蔵尊は、提灯が連なり、まさに地蔵盆の雰囲気（図㉖）。

天王寺区堀越町の清水地蔵尊は、弘法大師が杖をついたら水が出たという伝説の井戸があるところです（図㉗）。

このあと、西区に移動し、九条南の立江地蔵尊へ。ところがなにも祀っていない。それはどうして？と尋ねてみると前の土日に実施したという。つまり24日に祀ってないからといって、必ずしも地蔵盆をしてないわけではないということ。

次に、港区南市岡1丁目の公園へ。たしか7年前に行ったときはここで盆踊りをしていて、私も勧められて踊りの輪に加わったのですが、この日は何もない。尋ねてみたら、実は5年前から小学校の盆踊りに吸収されたということでした。

港区市岡元町の地蔵尊は、市岡高校の目の前、明々と提灯が灯っている。7時半から数珠繰りが始まり、私も加わり二巡りしました（図㉘）。

その後、ふたたび将軍地蔵尊へ。ここの雰囲気は荘厳で厳か。揃えの浴衣の人々が集い、盆踊りがたいへん盛り上がりを見せていました。

最後に私からの問いかけ

現在の大阪の地蔵盆を見て思うのは、やはり少子高齢化が地域や地蔵にも大きな影響を及ぼしているということでした。

最後に私からの問いかけです。

もし「大阪人」という「都会人」がいるなら、よっぽど踊り好きな民族なのでしょう。ボクも子どもの頃、お地蔵さんの前で踊りました。

明治の政府から野蛮（やばん）な習俗とお咎（とがめ）めがあろうと根絶やしされずに残った「伝統＝DNA」やったんです。

それが少子高齢社会を迎えた今日、お地蔵さんをめぐる環境がじりじりと変化していませんか？

今回の地蔵信仰フォーラムが市井の暮らしを見つめ直す、きっかけになれば幸いです。

＜2017年8月24日の地蔵盆の風景＞

㉔中央区上本町の六万体地蔵尊

㉕天王寺区上本町の将軍地蔵尊

㉖天王寺区大道の土塔地蔵尊

㉗天王寺区堀越町の清水地蔵尊

㉘港区市岡元町の地蔵尊では夜に数珠繰り

空堀界隈のお地蔵さんの近況と路地コミュニティ＋地蔵盆ナイトツアー

渡辺尚見 氏
からほり倶楽部 理事

わたなべ・なおみ
大阪府出身。2011年から、からほり倶楽部の理事。2011～2013年に、近畿大学大学院総合理工学研究科博士前期課程に進み、研究面でも空堀と関わってきた。

＜地蔵盆 Photo ©Ikeda Hironobu＞

「からほり倶楽部」って何？

私が所属する「からほり倶楽部」（正式名称「空堀商店街長屋再生プロジェクト」）は、2001年4月の設立。空堀のまちなみを保存し、空堀商店街を中心とした魅力あるまちを創造することを目的としています。基本的には、長屋再生のハードの面よりも、都市の魅力を伝えることや、それを共有・体験するような活動が中心です。2011年11月には、創立世代から若い世代に理事が交代し、私もその一人に加わっています。

空堀の路地とお地蔵さん

「空堀」というのは、大阪市中央区谷町6丁目界隈のことです。東西は上町筋から松屋町筋くらい、南北が安堂寺や長堀通から南の地域。そこは、戦災を免れ、戦前につくられた路地や長屋などがまだ多数残されているところです。

その路地の中には、お地蔵さんのお堂、あるいは稲荷や神様の祠（ほこら）が祀られているところが多く、それは路地ごとに異なっています。

地域の単位には「町会」とそれを細分化した「班」というものがあり、昔は路地ごとに隣組と呼ばれていて、路地によっては「○○会」という名称をつけているところもありました。

聞いてみると、お地蔵さんのお堂や稲荷や神様の祠の持ち主は、「個人」「隣組（路地）」「町会」と様々。隣組が転じて班になっていることも多いようです。

この空堀界隈は、大阪の中心地に近く、利便性が高い地域です。そのため近年のマンションの建設などにより、お地蔵さんも、いつの間にか少しずつ減ってきています。元々お風呂屋さんだったところが解体されて、現在マンションを建設中ですが、地元の方からは、ここにも祠があったと聞きました。

また、お地蔵さん本体を自宅に祀っている方や、土間にお堂を置かれている例もあるようです。いずれにしても、近年、徐々にお地蔵さんとの向き合い方が変わってきていることを強く感じています。

空堀界隈の地蔵盆

空堀界隈では、大体8月23日・24日に、10～15か所のお地蔵さんで地蔵盆が行われています。

お地蔵さん自体の数はもっとあっても、チラシなどで告知しているのはこれくらい。お寺さんが来られてお経を上げるだけとか、家族だけでやっている例もあり、隠れた地蔵盆は実はもっとあるのではないかと思われます。

7カ所を巡ると大きなご利益が

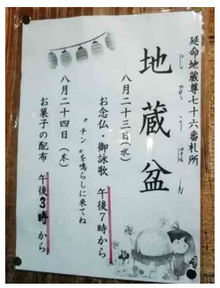
地蔵盆になると、お地蔵さんを中心に提灯やお供え物などが準備され、夜になると都会のまちなかに非日常で幻想的な空間が広がります。

多くの地蔵尊では、23日の夜の19時ごろからお経やご詠歌を唱えはじめます。ご詠歌は、昔は全部生の声。自分たちで唱えていたのが、近年は先導できる人がいなくなってきていて、カセットテープの声に唱和していることも多い。

複数の人から聞いた話ですが、23日の夜に7か所（以上）にお参りに行くとご利益があると言われているそうです。実際、頑張って回っておられるご年配の方なども見かけます。ところが、地蔵盆をやっている側の人は、「回れば良いことあるそうやけど、むりやわ」と言います。小さなコミュニティで地蔵盆をやっているので、他所のことは、あまりわからないそうです。

数珠回しやお菓子の配布

数珠回し（数珠繰り）は、お坊さんが来られ、読経に合わせてみんなで数珠を



地蔵盆が近づくとお知らせのチラシが張り出される

お地蔵さんの周囲にしつらえが施され、お供え物が運ばれる

地蔵盆の当日は、普段は入りにくい路地も開放的に

＜上4点、地蔵盆 Photo ©Ikeda Hironobu＞

提灯に灯りがともると、幻想的な雰囲気に一変

8月23日の夜、鉦を打ちながらご詠歌を唱える

僧侶の読経に合わせて数珠を回す

回します。これも、するところとしないところがあります。なぜしないのかと尋ねると、「もともとやらないから」というのがほとんど。宗派によるのかも知れませんが、はっきりとしたことは不明です。

8月24日の昼間には、お供えのお菓子を子どもたちに配布します。200～300円くらいのお菓子の詰め合わせで、中味はいろいろ。ジュースが入っている所もあれば、ない所もある。お地蔵さんにお参りした子には、お下がりであげるというかたち。

今、谷6界隈ではマンションがどんどん建っていて、路地に住んでいる方の人数以上に新しい住人が急激に増えてきているのが現状です。

近年は、小学校の校区も広くなっていて、子どもやお母さん同士の口コミで情報が広がっていくので、地蔵盆の当日は路地にすごい数の子どもがやってくるようになりました。路地の入口に自転車を止めて、大きい子は自分たちで、小さい子はお母さんと一緒に回ります。

お母さんが結構必死の形相で、怖いくらい（笑）。そう広くない範囲で、お菓子を何袋ももらえるので、子どもたちはすごく喜んでいます。でも今は競争みたいにして回るような状況で、それで良いのかはちょっと疑問。どこか心が痛いところがあるのも確かです。

地蔵盆には共同作業が不可欠

地蔵盆では、常に何人かがお地蔵さんの前にいて、行事の合間におやつを食べて、おしゃべりし、打ち上げなどもするので、路地内のコミュニケーションを図る機会にもなっています。

また、今も路地に一、二世帯は、子どもが住んでいる家もあり、地蔵盆のときには、この路地に暮らす子たちの参加やお手伝いも期待されています。

通り沿いにあるお地蔵さんでも、面倒を見ているのは長屋に住んでいる人たちということがあります。また、個人所有のお地蔵さんの場合では、所有者が仕切り、近所の人が見張り番や提灯付けなどのお手伝いをするというかたちもあります。もちろん、隣組や町会が所有する場合は、当番制などで役割を分担しています。いずれにせよ、所有のかたちは違っても、地蔵盆は近隣の共同作業なしではできないということです。

地蔵盆を伝えるナイトツアー

数年前、大学院にいたときに、私は空堀の路地の実際を知る研究として、学生たちの協力を得て、同地域での「地蔵盆の実態調査」を行いました。

基本的に路地は私有地なので、簡単には入れないし、入ってはいけないところです。まち歩きでも通り抜けることはあっても、行き止まりの路地はなかなか入りにくい。ところが、地蔵盆の日だけは、入りやすくて、お菓子やお茶も出してもらい、すごく歓迎されるんです。この日は人が来るのが当たり前。普段は「閉ざされた路地」が、この地蔵盆の日は「開かれた路地」になるわけです。

ナイトツアーのはじまり

こういう空堀の文化をより多くの人に知ってもらいたい、ではそのためにはどうアプローチすればいいのか…。そのことを仲間で話し合っていた際に、それなら自分たち自身が実際にもっと空堀の地蔵盆を知ろうという声が出てきました。

そこで、からほり倶楽部のメンバーに提案して、地蔵盆を巡るツアーを2013年に実施し、その後も毎年続けてきて、今年で5回目になりました。

ツアーは、基本的には8月23日の夜に1時間程度で7、8か所の地蔵盆を回っています。最初の年は、空堀の設計事務所にいたイギリスの人が参加したこともあり、その後も空堀を訪れる外国の人にも日本の文化を知ってもらおうということで、「英語コース」も実施しています。

8月24日のお昼、路地の入口には自転車が並ぶ

路地の中も子どもたちでいっぱい

お参りすると、子どもにはお菓子のお下がり

配られるお菓子の袋

近くの高校の英語科で教えていた先生、ネイティブティーチャーとそのお友達が参加した年もあります。一昨年くらいからは、親子連れも加わっていますが、子どもがいることで、大人だけでは気づかないことも見えてきます。実際、子どもがいるとこんなにお菓子がもらえるのかと（笑）。メンバーの娘さんも、数珠回しなどを楽しそうに体験していました。

昔は多くの場所で盆踊りもやっていたらしいのですが、道に車が増えてきて、だんだんできなくなってきたということで、今も踊っているのは、公開空地を利用しているところが1カ所だけです。そこの会長さんはとても熱心な方で、その公開空地に地域のお地蔵さんを置かせてもらう交渉が実現すると同時に保存会を立ち上げました。ここでは地蔵盆は、子どもたちの楽しみとしてだけでなく、大人にお酒などをふるまい、大人たちの親睦を図るためにも活用しているそうです。

地蔵と路地の文化を伝えたい

この地蔵盆の日は、普段入ることができない路地に入ることができ、空堀の路地の住民の暮らしを垣間見ることができる貴重な日です。

一方、地域の人口が急激に増えているので、外から来た人のなかには、地蔵盆の意味をよく知らないままで、お参りしたらお菓子がもらえるという認識だけの人が多いのも実際。そこにやはり意識のずれを感じてしまいます。

この地蔵盆のツアーは、子どもとその保護者や空堀に暮らし始めた若者たちに、空堀の人が大切にしている路地の文化や地蔵盆の本当の意味を伝えるためのものです。今後もぜひ継続していきたいと思っています。

空堀地蔵盆ナイトツアー2017の案内チラシ

空堀地蔵盆ナイトツアーの一行

ツアーには親子連れも参加、数珠回しも体験

＜中央2点、地蔵盆 Photo ©Ikeda Hironobu＞

わがまちのお地蔵さんトーク

会場から（神田晃治さん）　私は現在、天王寺区五条地域の将軍地蔵尊保存会の総代をしています。

この地蔵は、江戸時代には大坂城東南の玉造口にあったものが、明治になって小宮町に移され、戦災に遭って昭和28年5月に五条小学校の横の今のところに祀られました。

ここでは昔から複数の町会で地蔵盆を行っていますが、次第にその規模が拡大して、現在は周辺11町会の合同で、地域ぐるみの祭りになっています。

平成15年には、お地蔵さんの覆い屋を新しく建てましたが、その際に日本最古の会社と言われる地元の金剛組に依頼しました。木造銅板葺きの本格的な覆い屋で、費用は約850万円。それはすべて寄付で賄われました。世話人の方たちの熱意があったからこそできたことですが、九州から東京まで、縁のある多くの人が浄財を寄せてくださった。それだけこの地蔵に思いを寄せる方が多いということ。

毎夏の盆踊りは、子ども盆踊り大会と称して五条小学校の校庭で太鼓の櫓を組んで実施しています。お菓子は、現在は2日間で1000名分を用意し、お守りもつくり、子どもたちに授与しています。

出店などもみんなが力を合わせて運営していて、地域のつながりづくりの一大行事ともなっています。PTAの協力も得て、今は新しい担い手も生まれてきています。

地蔵盆の将軍地蔵尊と盆踊り大会（2017年8月24日）

会場から（髙口真吾さん）　私は天王寺区の一心寺で「地蔵盆フェスティバル」の運営を担当しています。

一心寺境内には結縁地蔵があるのですが、これは地域の人が守っているものではありません。そこで逆に地域を越えてだれもが参加できるかたちでの地蔵盆を企画し実施しています。

8月23日には、子どもたちが良質な舞台芸術に触れる機会を提供しようということで、一心寺シアターで人形芝居の公演をし、これを前夜祭として、24日には一心寺の境内でボランティアの人たちが様々な出店やイベントなどを運営しています。来場した子どもにお守りとお店で使えるチケットを配り、僧侶が読経するのを

囲んでの大玉の数珠繰りや、夜には盆踊りも実施しています。

一心寺の地蔵盆での大玉数珠繰り(2017年8月24日)

ボランティアは50名ほどですが、その人たち自身も楽しんでいる様子。ボランティア同士が仲良くなって、ほかの行事にも誘い合わせて参加するなど、一心寺の催しを起点として新しい関係づくりも生まれているようです。

会場から（森下 真さん） 今から15、6年前になりますが、まちづくりコンサルタントとして福井県の小浜市の再開発事業を担当し、2年間ほど同地に単身赴任をしました。その間、地域をあちこち巡っているときに、辻々にある、少し奇妙な地蔵の存在に気がつきました。

「化粧地蔵」というもので、こちらの地蔵は顔や身体に鮮やかな色を塗っている。それを地蔵盆の前には海で洗って顔料を落とし、子どもたちが新しく化粧をするという風習が残されています。

これは、とても貴重な地域の文化資源。そう思った私は、小浜市に働きかけて、総合学習で地元の小学生にそれぞれの地蔵の由来やご利益などを調べてもらい、地図にするお手伝いをしました。

会場から（旗手節人さん） 私は、神戸市東灘区本庄地区に住んでいますが、そこでも、地域社会の高齢化もあって、地蔵盆行事などは次第に衰退しているのが現状です。ただ、ここのお地蔵さんには少し変わったところがあります。

それは、一カ所にたくさんの地蔵や石像などが並んでいることです。その理由は、昭和13年の阪神大水害の際、山の方で土砂が崩れて、川の下流にたくさんの地蔵や石像が流れてきたのを地域の人が拾い集めて祀ったからだそうです。私が関わっている延光地蔵には37体。近くの踊り松地蔵には50体ほどもあります。出自については不明なまま。神戸では、他の地域にも同様のことがあると聞いています。

神戸市東灘区本庄の延光地蔵には37体が祀られている

会場から（前田昌弘さん） 2012年に京大の研究室で、まちづくりの観点から京都都心の3地域で地蔵盆の調査をしました。

規模は小さいところが多く、20～30世帯ほど。ここでも少子高齢化の影響が大きいようでした。それでも、お寺からこの時期にだけ地蔵を借りて、毎年地蔵盆を続けている地域もあれば、子どもがいなくても、大人だけで行っている例もありました。

地蔵盆には、地域のそれぞれの主体が、いろいろなかたちで協力できる余地があります。荷物を運ぶだけ、お菓子を詰めるだけとかの、小さな役割を担うことができ、それが若い世代や新住民にとっても、地域に関わりをもつ、ひとつのきっかけにもなっているようです。そうした緩やかな関係から、地域の人同士のつながりを再構築していく役割も果たしていると言えます。

京都大学高田研究室による地蔵盆とまちづくりに関する研究報告資料（2015年）

地蔵盆は、時代とともに変化しながら危機を乗り越えてきました。そうした柔軟性をもつことで、きっと今後も続けられていくだろうと思います。その意味では、地域の中心にお地蔵さんという実物があるのが何よりも重要なことだと思われます。

渡辺尚見さん 京都出身の友人は、結婚して外に出た今でも、毎年地蔵盆には京都に帰って幼馴染みに会うと言います。地域に根付いている行事ですね。今日はみなさんのお話を聞き、地蔵盆のあり方もほんとうに様々ということが理解できました。来年はぜひほかの場所も回ってみたいですね。

田野登さん 歴史は記録されてはじめて歴史になります。少子高齢化が進み、地域の文化や歴史の伝承力が衰えていく現状がありますが、その意味で、地域のことを調べる総合学習などで、子どもたちが地元を歩いて、おじいちゃんおばあちゃんに話を聞く、自分の住んでいる場所の歴史を知って伝承していく、そういう芽を育てる試みがこれからはますます必要だと思われます。

福井県小浜市のお地蔵さんマップ（2005年）

2017年8月23日

2017年8月24日

フォーラムの後、西俊徳地蔵尊（「上町台地今昔タイムズ」第8号に掲載）のご関係者から2017年夏の地蔵盆の様子をお知らせいただきました。